

是為論これ ろん な～是を論と為す～①

『太極拳譜』の発見（その1）

虚領頂勁、気沈丹田。

これら稽古要諦の四字訣はすべて、古典文献から選り出されています。

古典文献といえば、「太極者、無極而生」で始まり「是為論。(是を論と為す)」で終わる『太極拳経』が有名です。虚領頂勁と気沈丹田はこれに記載されています。

太極拳の文献はたくさんありますが、一番古く、「太極拳」という名称の由来となり、その後のすべての太極拳理論の元となっているのが、この『太極拳経』です。

古典研究会の研究発表第1回は、この文献が発見から今日までどのように伝わってきているかについてまとめてみました。

この文献が発見されたのは1852年（日本では嘉永5年、黒船に乗ったペリーが浦賀沖に来航した年の前年）、場所は中国河南省舞陽県、発見者は後の武式太極拳の始祖・武禹襄ぶうじょうの兄、武澄清ぶちようせいでした。

『太極拳経』1篇だけではなく、合わせて4篇が収められていた1冊の論説集であったとされており、『太極拳譜』と呼ばれています。その作者については、4篇のうち『太極拳経』にのみ、「山右王宗岳おうそうがく」の署名があったとされています（山右は山西省を指す）。

しかし、発見された時すでに破損しており、表紙も表題もありませんでした。したがってこの文献は始めから『太極拳経』と呼ばれていたわけではないのです^{※注}。発見時には「太極拳」という名称もまだありませんでした。そのころ楊式太極拳の始祖・楊露禪ようろぜんが教えていた拳術は、「綿拳」あるいは「化拳」などと呼ばれており、武禹襄は楊露禪からこの拳術を学んでいました。

※注：『太極拳経』は、中国では一般的に『太極拳論』と呼ばれています。ほかの文献にもいくつか別名があります。また、この論説集『太極拳譜』のことが『太極拳経』と呼ばれることもあるようです。名称がいくつも存在するのは、これらの文献を伝えた後世の太極拳家たちによって、さまざまな呼ばれ方をされてきたためです。

◆『太極拳譜』に収められていたとされる4文献

文献名	別名
太極拳論	太極拳経
十三勢（一名長拳、亦名十三勢）	太極拳積名
十三勢歌	十三勢行功歌
打手歌	

さて、『太極拳経』は、作者とされている王宗岳の生年没年も不明でその経歴も諸説あり、また、この論述の対象の拳術が何であったのかさえ、実は明確にわかりません（槍術の訣文であるという説もあります）。それにもかかわらず、この文献がこれほどまでに重要視され、今日の太極拳の「秘伝・皆伝」あるいは「聖典」となっている理由は、何なのでしょう。それは、その文章が、あまりにも見事に的確に、根本原理を論じ切っていたからです。

易経の太極・陰陽の理論から始め攻防の原理、特徴、練習方法、注意事項を論述しています。

その圧倒的な説得力に深く感銘を受けた武禹襄が、この文献を研究・分析し、多くの解説文を残します。さらに弟子の李亦畬りえきよが、それらと自身の研究とを合わせて、1881年（明治14年）に3冊の手書きの拳法論（「老三本」と呼ばれる）を完成させます。

「太極拳」という名称は、武禹襄によって使われ始め、李亦畬が初めて文書に記したようです。

武禹襄と李亦畬の著作は、文献や伝承だけの研究ではなく、自らの実践経験と結び付けて具体的に記されています。

楊露禪の拳術は、さらに露禪の子班侯・健侯によって普及され、楊派と武派との交流によって武・李ふたりの理論研究がその技法に織り込まれていきます。実践と理論が両輪で発展してきたことで、太極拳は太極拳たるものに進化していったのです。

どのような学びも、実践から理論へ、理論から実践へという双方の過程を経て確立されており、太極拳も例外ではありません。理論は技法と結びついて初めて価値が出ます。繰り返し理論に戻り技法を確認していく必要があります。

そのためにこの『太極拳経』は、「聖典」とされているのでしょう。

* * *

今回は、この『太極拳譜』の中から、『太極拳経』以外の文献をご紹介します。どうぞお楽しみに。